

国際的な視野から見た近代真宗学、 または教学者の意義

J. ヴァン ブラフト

昔から私は——どうしてもキリスト教の立場からでしょうけれども——真宗の入門書を書こうと思っていました。そして特に曾我先生を紹介しようと思ひまして、12年前のことですけれども大分訳したこともあります。あわせて何頁か私は数えていないけれど、大体300頁くらい訳しました。ただみんな抜粋ばかりで、続けて一つの論文を訳したことはありません。後からその理由について一言述べておきたいと思います。

ここでテーマになるのは、やはり国際的な視野から見た教学、真宗教学のことですね。その意味を考えると二通りの意味を含むのではないかと思います。やはり一つは国際的環境といひましょうか、その中でできる教学、それが一つです。

そして第二は外国への発信、つまり外国向きの教学です。そして今私は外国と言ひましたら西洋というものを考えているわけです。私は他の外国語が十分に分かりません。例えば韓国については私は何も言えませんが。韓国でどうしたらいいか、どういう風に紹介したらいいかに関しては、私は何も言えませんが。何故かという、韓国語を知らないからです。それで西洋への紹介を考えているのです。

両者の意味はもちろん密接につながっていますが、ただ必ずしも同一のことではありません。それぞれ何か特別なところもあるんじゃないかと思ひます。そしてまずその国際的な状況、環境の中で生まれる教学について一言いたしたいと思ひます。

やはり視野を日本という国を超えて国際社会に開くようなものの中で、教学ができるということですね。よく言われた言葉ですけれども、世界の真宗、または世界の親鸞、そこにはそのような意味あいが入っているでしょう。それに

はどういう風に真宗、あるいは親鸞を国際的に位置づけることができるかという問題が出ていますね。そしてやはり真宗は世界に何をもたらすことができるか、という事も中心的な関心事になるはずでしょう。従来真宗が自分の事を自覚、そして自己定義といいたしめようか、それをしたのは全く日本の中において、つまり日本という国の中で、その歴史的、政治的、そして社会的制度の中で自分を自覚したわけです。それに関して色々な実例をあげることができるでしょうが、それは省略します。そして日本の他宗教、特に天台の教学や禪に対して自分を定義してきたわけですね。真宗の歴史の中でそれも大切なことだったと思います。

そういう風に真宗は自分を大衆の宗教、凡夫の宗教と定義してきたでしょう。それから他力の宗教、専修の宗教とも定義してきました。特に法然上人が強調したところかもしれません。行は一つだけ。それから神々を拝まないとかです。親鸞はそれをある程度強調してきたでしょう。国際的に見て、ほかにそういう宗教があるかというふうに考えたなら私は一つもあげることはできません。もし皆さんがご存じなら教えて下さい。国際的にいいますと、他力の宗教として真宗は必ずしも唯一のものではないでしょう。やはりヒンズー教の中のバクティマルガに関して真宗はどういうものかという問題も出てくるでしょう。それからもちろんキリスト教に関してです。キリスト教も一応恩恵の宗教といわれるわけでしょう。そして真宗が自分を定義してきたのは、ある程度は信徒に対してよりも、主に仏教の他宗派に対してでした。例えば神頼みに対してですが、それを捨てるということは神道に対し自分を定義したのみではありません。神頼みは民俗宗教ですから、日本の民間信仰に対して自分の立場を決めたことになります。それで真宗には「祈りはない」といわれてしまいました。

私は昔ハワイの本願寺派のお寺で一度話をしたことがあります。私の前にアメリカのお坊さん、海野大徹さんが話をして、そして彼は、日本語で真宗には祈りはないと言ってもいいですけども、英語で “There is no prayer in Shinshū” は絶対ダメだと強調したわけです。細かいことですけども、大切なことです。両者の意味あいは違いますね。西洋の中の祈りと日本の中の神頼みとは、意味あいが全く違います。それで、そのまま訳してはいけないと海野さんが強調されたわけです。

そして国際的環境では、真宗は自分を何に対して改めて定義することができ

るかという問題が出るんじゃないかと思います。例えば先ほど言ったヒンズー教のバクティマルガも入って、すなわちある程度人格的絶対者に対する帰依、全く自分全体を委ねるという事を強調する宗教、“Religions of Devotion”とよばれる宗教ですね。そういうところに対してなどでしょう。

そして大きな問題ですけど、真宗は西洋における一神論ですか、有神論と無神論に対してもう少し自分の立場を決めなければならないと思います。そしてそういう理論の中に真宗は新しい立場、つまりこの二元論を超える立場を出すことができるかもしれません。それは一つの真宗の教学の中に含まれている可能性じゃないかと思われます。

そして国際的環境の中にできる教学といいますと、どうしても他宗教との対話が picture に入るはずです。今、諸宗教がお互いにぶつかってお互いに自覚してきた現在では、他宗教を無視して自分の伝統の中からだけ発展する教学はもう時代遅れといわざるを得ないと思いますし、逆に言いますと今になって各宗教の教学の発展の一番すぐれた可能性は他宗教との対話の中にあるのではないかという確信を私は持っているのです。

さてそういう国際的視野、環境は真宗教学に初めて浄土教の独自性をいかすような教学を作り出すチャンスにあたえているのではないかと思います。私は今まで真宗は十分に自分の独自性を活かすような教学を持ってこなかったと思っています。それは私の感じでもそうなりますけれども、ただ幸いに曾我量深先生もそういう風に考えていました。私はそれをこういう形でよそでも発表しましたし、皆さんのお手元にある“Japanese Religions”の論文の中でもいっておりますが、教学者の本を読むと、多くの真宗の教学者はあまりにも熱心に浄土門を大乘仏教一般に還元しようとしすぎるとするのが私の強い印象です。そして確かに浄土教は本当の大乘仏教ですし、浄土教にとっては大乘仏教の理論や論理は非常に大切ですけれども、その論理——いわば空の論理といいましょうか——だけによって浄土教全体、その独自性を説明することは決してできないと私は思います。

そこで曾我量深先生は次のようにいいます。それは1917年の文章で、大分若いときの文章です。「浄土教の学者も天台と華嚴の範疇を嘆美するが曇鸞の往還回向の広大深信の範疇が分からぬのではないか。やれ宗体積、やれ大意釈とみ

な天台くらいを標準にするのは悲しいことである。700 年前に浄土真宗が独立しているのに、宗学は依然として他宗教の付属である。大谷大学の教授、学生はこの大使命を実現すべき覚悟を当然生存上の必要とせねばならぬ」（『選集』第4巻、416頁）と。ちょうど80年前の言葉ですね。

そして1934年にはこう言ってます。「親鸞教学の中心点といえどどういうところにあるかということは——それを知りたいという自分のねらいだと曾我先生はいっているのですが——だからして漠然として仏教一般の眼目というものだけを見て、そして浄土真宗独自の眼目というものを忘れないようにしていきたいと思います」（『選集』第10巻、350頁）と言っています。

もうひとつ曾我先生の言葉を挙げますと「所謂真宗学の対象とは何ぞや。真宗学は信というものの原理、信の背景としての願を明らかにするにある」（『選集』第10巻、189頁）と言っています。一言で言いますと、慈悲のはたらきは浄土教学の根本的のところにならないといけないと言っていますね。

私の知っている限りでは、大乘仏教の論理は必ずしも慈悲を中心とする教学ではないですね。しかし浄土教学ではいつでも慈悲が土台になるはずでしょう。キリスト教の教学、神学の根本的なところはやはり慈悲、愛にあるはずですけども、あいにくキリスト教の教学もそうしていない。伝統的なキリスト教の教学は愛のかわりに、やはりギリシャ的形而上学から出発してきたわけです。それで、残念ですが、キリスト教の教学から学ぶことはあまりないかもしれません。しかしお互いに争って本当に慈悲から出発する教学を作り出さなければならないのじゃないかと思います。愛、慈悲を一方的に智慧に還元しないような教学、キリスト教では愛を有ですか、Being に還元しないような教学がただ今求められるのじゃないかと思います。

そして第二の意味として、やはり外国における布教に役立つような教学と、さらにその一部として西洋人にピンと来る教学が求められます。もう一つ言いますと他宗教の教学者、特にキリスト教の神学者のためになるような教学、彼らがそこから学ぶことができるような教学の紹介が求められるのではないかと思いますね。それで他国へ向けた教学に於いて必要になるのは、外国人が自然に問題として感じる教学の点についてのピンと来る説明です。では、どうしても外国（とりあえず西洋）に於いて問題になりうるものを次に少し挙げさせて

もらいます。

まずやはり浄土教と仏教一般、あるいは大乘仏教一般との関係についてのピンと来るような説明です。皆さんご存じの通り、西洋人が受けがちな感じは浄土教は仏教ではなく、むしろキリスト教に近いものだということです。西洋人のところではそういう感じは自然にわくのです。本当のところはどうでしょう。私の意見は“Japanese Religions”の中で説明したつもりです。一言でいいますと、浄土教は本当の仏教でありながら部分的にキリスト教に近いと思います。そして浄土教の仏教たることを証明するために無理矢理にキリスト教との共通点を否定する必要はないというのが一つの結論です。それでいわゆるキリスト教国における真宗の理想的な紹介の仕方は、次のようになればいいのではないかと思います。

一つは真宗は仏教の良さとキリスト教の良さを combine、統合するような宗教だという紹介です。それが理想的な仕方じゃないかと思います。しかしあいにくそれはそんなに簡単ではありません。布教の立場に立つと一応一番いい戦略は、なるべく仏教的側面を強調することでしょう。一般仏教的なところを強調すればいいのじゃないですかね。何故ならこの場合聞く人、audience はキリスト教がきらいになってキリスト教となるべく違うような宗教を探しているという事実があるからです。誰か忘れたけれどもお坊さんが、私に外国での真宗の布教はなるべく仏教一般の紹介から始めた方が効果的ですよと言っていました。戦略的に言っておそらくその通りでしょう。それは理想的な事ではないですけど、実際の状況から言いますとそうせざるをえないということです。それが一つです。やはり西洋人にピンと来るような仏教一般、特に大乘仏教一般と真宗の関係の説明が必要でしょう。

もう一つ必要なのは西洋の論理にピンと来る「願力」の説明です。願力、願の力。願はどこからその効果性を持っているか。一つは本願をどう英訳したらいいかという問題から始まるわけですね。そんなに力のある、効果性のある、自ら自在に成就するような、prayer とか——それは鈴木大拙の本願の翻訳ですけれども——、または vow といっても、それをもし人間がするのであればそんなに力のあるはずはありません。では願力はどこから来るのか。それはすぐに西洋人の頭の中にかぶ質問です。その vow の主体の問題になるでしょうね。あまりにもただの人間だと強調しますと人間の vow にそういった力があるは

ずがないとすぐに返ってくる。その問いに対する説明が必要です。

もう一つは西洋で一般にカルマと考えることと、真宗における業、宿善とかとして考えられることとの関係も十分説明しなければダメじゃないかと思います。それに私の感じからフランス語で *l'honnêteté des mots* という問題が入ってきます。フランス的な言い方で、日本語でどう言ったらいいか私にはよく分かりません。言葉の正直、誠意といったらいいのかよく分かりませんが、言葉をあいまいにすることによって話をしないことです。言葉の本当の意味を使う。例えば共産主義国では自由という言葉を全く別の意味で使ってしまいますね。それに本当の自由の意味が無くなります。しかし私の感じでは、時々真宗の教学の中にはそういうことがあるという感じがします。それは少なくとも西洋では避けなければなりません。真宗の今までわりに閉じられた language game——この頃よく言われる言葉ですね——では、言葉を知らず知らずその普通の意味から離れた意味で使ってしまう。そして全然気がつかないである時には本来の意味、そして別の時には新しい意味の良さを場合によって使う。それは業の場合では確かに行われていると思います。

例えば、業のことに關しては「キリスト教は合理的ではなく、真宗は合理的です」と議論されることがあります。そして確かに本来の業の意味は割に合理的な法則の意味を含んでいます。しかし真宗の中の使い方では絶対そんなことではありません。その業の中に明らかに阿弥陀様の慈悲が入ってきてそれで合理性と関係ないことになります(キリスト教における神の愛と同じく)。そうでもないともう宿善によって信仰を得るということは、自分の行い(自力)によって信仰を得るということになります。その場合に阿弥陀の回向は業の本来の意味、合理的な意味においては必要がなく、それに場所がありません。場合によって業の意味を違ったように使うことは *l'honnêteté des mots* に反することだと私は強く言いたいのです。もちろんそれは閉じられた language game の中に知らず知らずに行われるのですけれども。国際的に考えるときにそれに気付くというチャンスが今与えられていると思います。もちろんキリスト教の神学の中にもそういうところがあると私は思いますので、お互いに指摘しなければならないと思います。

そこに私にとっての曾我量深先生の良さの一つがあるのです。先生は多くの場合ちゃんと自分で見てそういうところを訂正してみるわけです。例えば業だ

けのことを引用しますと先生は、「我ら善知識の教えによりて、本願の成就と六字名号を聞くとき、云何にして忽然として信仰の確立を得るや。惟うに古来、或いは宿善開発といい、宿縁を変ず。という。それ果たして何等の意義をか顯わせる。乞う思え。これを常識をもって文字どおりにそれを解釈せば、純粹他力の義はその根底より破壊せられんのみ。」(『選集』第1巻、182頁)それも古いテキストですけど確かにそうです。そして先生は真宗の中の業とは何かということを明らかにしようとしています。そこにいろんな事を挙げることはできますけれど、それを少しスキップします。

第四の点として西洋ではよく注意して説明しなければならないことは、阿弥陀如来の実在、reality です。あまりにもその reality を相対化すると、西洋人はそういう余り実在的でないものに自分の全体を帰依することができるのか、すぐそういうような感じになるわけです。

先ほど外国の神学者の役に立つような教学の紹介と言いました。やはりキリスト教、ユダヤ教、イスラム教の神学に貢献できる点をなるべく紹介しなければなりません。しかしそれはどこにあるかという質問がありますね。それをみんなと少し考えたいと思います。

私は一般的にいて真宗の教学が貢献できることの所以は次のところにあるんじゃないかと思います。それはやはり真宗がキリスト教とよく似ている自分の宗教性を空の論理、大乘仏教の論理の中で考えてきたところだと思います。それで完全な真宗の教学はできないとも私は考えますけれども、それでもいろんな点をそういう論理をもって考えてきたわけです。キリスト教は同じようなことをギリシア的論理をもって考えてきたのであり、その点ではキリスト教は非常に真宗から学ぶことができるのではないかと思います。確かにギリシア的論理はあまりキリスト教に合わないと言わざるを得ません。しかし今まで大体使ってきたわけです。例えばもう一度今度は別の立場から見て、真宗の中の阿弥陀の実在、reality に関して考えられてきたことは神の実在を考えるために非常に役に立つのではないかと思います。そのことを私は主に曽我量深の書いたものを参考にし、皆さんの手元にある私の論文の70～74頁で少し書いておきました。そのことは非常にキリスト教の神学にとって参考になるものじゃないかと私は思います。阿弥陀の実在と、阿弥陀と衆生との関係。それはお互

いに密接につながっている問題ですね。

もう一つの点は、私が今まで考えてきたところでは、名号、すなわち言葉の重要性、根源性ですか、中心性についての説明です。それに関して真宗の教学の中にも割に書いてあるわけです。そして確かにキリスト教、ユダヤ教、イスラム教には言葉も非常に大きな役割をしているわけです。

そして京都学派の思想の外国への紹介についても一言ふれるようにと、この間頼まれていました。その点について非常に簡単に言いますと、西洋の神学者にとっての京都学派の思想の魅力は何と言ってもその思想がキリスト教の神学における教えのいろんなテーマ、項目、問題について、キリスト教の神学とは別の立場や、別の論理をもって取り扱っているというところにあるに違いありません。そしてそういう違った立場、違った論理からキリスト教の神学が学ぶことができる、そのような思いは向こうの神学者に自然に起こるのです。そこに西谷先生の本の翻訳の成功のルーツがあるのではないかと思います。主に神学者の場合ですね。哲学者はそれほど興味を見せてないと思います。

そして先ほど言ったとおり、京都学派の思想ばかりじゃなくて真宗の教学に於いても十分そういうところがあるわけです。それで同じような役割をすることができるし、もし上手に紹介したら、同じように向こうの神学者の興味を惹きつけることができるんじゃないかと十分思われるわけですね。

そして最後に、真宗の外国への紹介に関して曾我先生がどういう役割をすることができるかについて述べさせていただきます。曾我先生の文章の中には、先ほど挙げた条件、つまり外国の神学の刺激になるような条件を満たすものは多いと思います。割に西洋人一般にピンと来るもの、そして神学者に面白いものがあると思います。しかし、曾我先生の長い論文になると、それをそのまま英訳して外国に紹介した方がいいと思われるものは少ないと思います。何故かといいますと長い文章になりますとテクニカル過ぎる部分が入ってくるわけです。すなわち曾我先生は伝統的な教学の微妙な区別などに対して自分の立場を位置する。教学の世界ではそれは当たり前ですが、外国人はそれに関してあまり興味をみせるはずはありません。あまりにもたくさんの教学の歴史の知識を前提としますから、そこまで勉強したい神学者はあまりいないでしょう。それ

はどうしてもスキップしなければならないと思います。そういうあまりにもテクニカルすぎる部分、たとえば信が受け身ですか、行が受け身ですか、等です。いろんなそういう歴史があるでしょう。所信の行とか。そういう言葉はスキップした方がいいと私は思います。とにかく一般の神学者はそこまでは興味を示さないと思います。

そして皆さんご存じの通り、もう一つの理由があります。それはある意味では京都学派の文章の場合でもそうなのですが、日本の文章は repetitive になりすぎるといことです。何回も同じようなことを言ってそれで対象に近づくことですね。それはそれでいいですけど、日本的ですね。ただ外国ではあまりピンと来ない。何回も同じことを言っている、という感じが西洋ではします。

皆さんのご意見はどうか分かりませんが、曾我先生の文章には、突然何かインスピレーションのようなものが入ってきます。その場で全然裏づけは出していません。そして、次の論文にそれをもう一度取り挙げてもう少し説明する。そのような文章と一緒に説明した方がいいと思います。曾我先生はこう言っているけれど、どこからそれはくるかピンと来ない。

そして最後に、曾我先生の文章は、若いときの文章の方がすぐれているのではないかと思います。後になってからは、少なくとも西洋人にとってはあまりにもナチュラリスティックになる傾向が感じられます。自然、本能などの書き方は西洋にはピンと来ないのではないのでしょうか。そして民族精神とか、それもあまり西洋ではピンと来ないと思われます。

いわば結論としては、曾我先生の文章を外国に紹介すると多少編集しなければならないということです。もちろん非常に立派な文章であり、西洋人はそこからたくさん学ぶことができると思います。問題になるのはどの文章を先に紹介するか、ということですね。

御静聴ありがとうございます。

(成文 田村晃徳)